

中学生・高校生・大学生の同性愛者(LG)への態度と 被異質視不安傾向・異質拒否傾向との関連

葛西 真記子*, 田中美月**

(キーワード: 異質拒否, 被異質視不安, セクシュアル・マイノリティ, 同性愛)

【問題と目的】

1. 近年の同性愛者(LG)を取り巻く現状

同性愛者であるレズビアン・ゲイ(以下、LGとする)に対する社会的認知度は深まってきており、2015年、東京都渋谷区での同性パートナーシップ条例の施行にはじまり、世田谷区のパートナーシップ証明書発行、兵庫県宝塚市のパートナーシップ宣誓に対する要綱制定、2018年9月6日には、中野区で開始されたパートナーシップ制度によってレズビアンのカップルがパートナーとして認定され、メディアでも話題となった。2019年末には、全国で30の自治体においてなんらかのパートナーシップ制度が認められる。このように異性間での婚姻と同等の権利を得るには至っていないが、法的にも認められつつある自治体が各地で増加してきている。2017年度の教科書改訂により、一部教科書上(高校の公民や家庭科)にセクシュアル・マイノリティの記述が見られるなど、少しずつ性の多様性が認められる社会へと変化してきた。

2. LGの定義

LGの定義は明確には定まっておらず、当事者の自認によるところが大きい。石丸(2003)は恋愛感情や性的魅力を同性に対して感じるかを基準に定義し、身体性と性自認は一致していると定義したが、葛西(2011)は同性愛及び両性愛を「性的指向が一時的、または永続的に同性あるいは両性に向いており、自らをLGBと名付けている人々」と定義した。性別違和を感じ、かつ性的指向が同性に向かう場合はLGとも考えられる点、性的魅力に関してはノンセクシュアルの人々の存在を考慮に入れるべきであると考えられるため、ここでは葛西の定義を用いる。なお、この場合の同性とは、性自認における性別の同性とする。

3. LGへの否定的意識の存在

条例や法令等、LGへの対応は進みつつあるが、2015年に吉仲・風間・石田・河口が行った、「同性愛や性同一性障害(GID)など、セクシュアル・マイノリティの人に対しどう思うか」という意識調査では、同性婚反対派の割合は48.9%であり、友人が同性愛者であった場合、抵抗がある人の割合が男性で53.2%、女性で50.4%であった。関係の近い人ほど嫌悪的な意見が多くなり、同僚では42%、子どもでは72%の参加者が、同性愛者であったら嫌だと回答している。他に特徴的な結果として、同僚が同性愛者であったら嫌だと回答した40代男性の割合は71.5%であった。Pew Research Center(2013)が世界38,000人を対象に実施した同性愛に対する社会的容認度の調査においては、日本では同性愛を容認する派は全体で54%、内訳として30歳未満では83%、30歳～49歳で71%、50歳以上で39%であった。2007年度の調査結果である容認する派は49%と比較して5ポイント上昇したが、80%～90%であるスペイン、ドイツ、カナダなどの国々と比較すると、未だ否定的な見方が強いと言える。

また、LGBTという言葉そのものの認知度は上がってきたものの、一般的には未だGIDとの誤認や、性的嗜好と混同されることもあり、「知っている」ことは必ずしもセクシュアル・マイノリティへの理解が進んでいるとは言えない。

2015年には市議会議員が「同性愛者は異常動物」と発言して問題視される、2017年にはフジテレビが「保毛尾田保毛男」というキャラクターを登場させて大きな非難を受けるなど、差別的言動がメディア等公の場で行われ

*鳴門教育大学心理臨床コース臨床心理学領域

**公認心理師

る騒動も見られる。非常に影響力の強い、大勢の人間が制作に関連するようなツールでさえ、堂々と差別的言動が行われるなど、無理解、差別の問題は続いている。

2015年には、ある大学においてアウトティングを苦にして大学院生が自死したと争論が起きている事件が起きた。セクシュアリティの要因は、現状では友人関係に深刻な影響を与え、強い苦痛を伴う場合がある。

4. 偏見と接触仮説

否定的態度は偏見の一部とされており、偏見についての研究は数多く行われている。本研究では偏見を、池上(2014)の定義である「対象に対する否定態度を指し、対象集団に関する否定的内容の信念や感情、行為意図を含んでいる」とする。しかし Allport(1954/1968)は、偏見が圧倒的に好意的よりも非好意的な方向に存在していることを指摘しつつも、「偏見とは、実際の経験より以前に、あるいは実際の経験に基づかないで、ある人とか物事に対してもつ好きとか嫌いとかいう感情である」と、肯定的偏見の存在を含めた、広義での偏見の捉え方について述べている。

偏見そのものの強弱に影響する要因として、Triandis(1995/2002)は、一概には言えないが、偏見や差別は集団主義者に強く、個人主義者に弱く見られると示唆している。

また、Allport(1954/1968)は、偏見は相手に対する知識の欠如が大きな原因であるとし、人は自分の否定的態度を説明する際、否定的に接する集団に特徴づけられる性質を挙げ、自身の所属する集団との差異の存在こそが否定的態度の根拠であるとする。実際には差異は必ずしも偏見の直接的な要因になるとは限らないが、差異は否定的態度の根拠と主張する者は多いと述べている。

Allport は合わせて、偏見を解消するための理論の1つとして、接触し正しい情報を得ることで偏見は解消するとの主張である接触仮説を提起した。前述より、差異を否定的態度の根拠とする場合、接触することで差異が存在しないまたは小さいという事実を理解することは、偏見を持つ人々の主張を弱める。その際、多数者集団と少数者集団が対等の立場で共通の目標を達成するような接触であること、両者の接触が制度的に是認されていること、両集団に共通する関心のある接触であるべきだとしている。

5. LG への偏見・態度に影響する要因

接触体験や知識が豊富であることは LG に対する偏見にも肯定的影響を与えるという先行研究は数多く示されている。例えば、友人が同性愛者であると開示された場合、同性愛への見方が好意的になるという研究結果(和田, 2010)や、同性愛者との接触体験は、同性愛者への態度に良い影響を与えるという研究結果(山本・大蔵・重本, 2012)などがある。

対して、LG に対する偏見を強める要因についての先行研究としては以下が挙げられる。和田(1996)は、男性は女性よりも同性愛に心理的距離感を持っており、更に社会がそれぞれの性に期待する性格特性に一致する者ほど、同性愛者への態度が否定的であることを明らかとしている。桐原・坂西(2003)も同じく、日本における男性役割、女性役割に対する固定的な観念の存在を指摘している。

関係性が近いほど嫌悪的になるという吉仲ら(2015)の調査から、正しい知識を持たない状態や関心のない状態での同性愛のいう概念と予期せぬ接触をし、開示した LG との関係性が近いことは、セクシュアリティを開示した相手に対する強い嫌悪感を引き起こすと予想される。家族よりも友達の方が自らが LG であることを開示しやすいことについて、梶谷・横山(2007)は拒否的な反応をされたときに関係性を断ちやすいためと考察しているが、親しい関係性であるためにどのような反応があるか推測しやすく、カミングアウトが難しくなることや、そもそも親子間など近い関係性におけるカミングアウトは、強い嫌悪感が発生しやすいと当事者が感じることも関係すると推測する。

中島(2012)はこれらの先行研究の要因に加え、自尊感情など更にいくつかの要因の影響を検討し、他者受容度が LG 嫌悪・拒否的感情に影響していること、自尊感情が容認・寛容的感情に影響していることを明らかにした。また、吉仲・風間・石田・河口(2015)の研究では、基本的には年齢が上がるほど同性愛に対して否定的な意見・態度を持つことが示された。

6. 年齢・世代による LG への態度差とその要因

前述の吉仲らの研究(2015)により、20代から60代を対象に調査し、年齢が上がるほど同性愛に対して否定的な意見・態度を持つことが示された。これは性役割態度に対する社会通念が変化してきたことや、時代の変化と

共に個人主義的な考えを持つ人が増加したこと（家制度の廃止等）などが影響していると言える。また、BL（ボーイズラブ）・GL（ガールズラブ、百合と呼称される場合もある）と呼ばれるような、男性同士または女性同士の恋愛を描いた創作物は、1970年代から一般に販売される機会が増え、愛好されることで2015年度には220億円の市場規模となっている。中島（2012）は、BL・GLに接触したことがある、または現在も接触している場合、同性愛態度が肯定的であることを明らかにしている。ただし、「百合（創作物における同性愛）と現実の同性愛は別」「GLはきれいだがBLは汚い」「同性愛(BL)は美しくて憧れる」といった、現実のLGとの乖離や、インターネット等で非常に有名な創作ゲイビデオの影響から「ホモはノンケ（異性愛者、ここでは異性愛男性）を襲う」といったイメージを抱くといった誤解も筆者は見聞きしている。否定的偏見はもちろん、肯定的偏見もまた、LGの精神的健康を阻害すると推測され、創作物以外の情報も必要であると考えられる。

また、2018年放送のドラマ「おっさんずラブ」は男性同士の恋愛をテーマとしたドラマであるが、10～30代女性に大きな人気を得たものの、男性視聴者が少ないとも評価されている。そもそも偏見・差別的な考えを持つ場合、趣味嗜好的なツールでの接触によるLG態度の変容は容易ではないだろう。

様々な要因により、総論的には年齢が高いほど否定的であるとされるLG態度だが、それでは年齢が低いほどLGに対して肯定的（または否定的でない）かといえ、必ずしもそうとは言えない。田中・伊藤・葛西（2019）は、中学生と大学生で同性愛への態度を比較した結果、中学生は有意に同性愛への態度が否定的であった。ここから、中学生は前述した要因以外にLG態度を否定的にする要因があると推測する。

7. 中学生・高校生におけるLGへの否定的態度を強める要因

これまで、LGへの態度に関する先行研究は数多く行われてきたが、対象者は大学生や大学院生が多く、また日本社会全体を対象とした研究でも、20歳以上を対象にしたものがほとんどである。しかし、中学生に否定的態度があるとの研究から、中学生における態度変容の要因を検討する必要がある。

対象に対する適切な接触と正しい知識の不足は、偏見を強めることがすでに指摘されているが、学校教育におけるLGを含む性的マイノリティへの正しい知識の普及は進んでいるとはいえない。文部科学省はセクシュアル・マイノリティの児童生徒学生への配慮ある対応を求めた通知（2010, 2015）を出し、2016年には、教職員のための児童生徒への対応に関する手引きが作成された。また、2017年度の教科書改定で、中学生用の道徳の教科書の一部がセクシュアル・マイノリティについて取り上げたが、教科書として、または該当部分を採用しない学校も多く、どのように使用・指導するかは教員に任せられている。その他一部道徳の教科書では、社会的に男女交際を当然のものと想定した記述や、男らしさ、女らしさが期待される記述も残っている。松尾（2013）は、家庭科学習の指導要領に、前提として、家庭を築くのは男女といった「男女二元論」「異性愛主義」が見られることを指摘している。教科書の挿絵やイラストに、「ピンクのスカートで長い髪の女の子」と「水色のズボンの男の子」が仲良くしているものが使用される、男女によって不必要に色分けするなど、はっきりと述べられなくても、男女二元論、ジェンダー的な男女像が隠された教育として実施されている場合がある。

小学校・中学校の保健の教科書では、思春期を迎えると、人は異性への関心が芽生える、関心が高まるとの記述がある。性の多様性についての記述が見られるのは主として高校教科書であり、性指向を自覚する時期を迎える中学生に対して、正しい知識が不足しているのが現状であり、中学生と高校生ではLGに対する態度に違いがあるのではないかと推測できる。

前述したように性同一性障害等、ジェンダーアイデンティティへの特有の支援や相談体制の充実については文部科学省からの通達が行われたが、性的マイノリティを包括した配慮は行われていない。異性愛主義を前提とせず、性の多様性を学ぶ教育が必要であろう。

8. LG当事者の心理的健康

LGの心理的健康においては、コミュニティに参加しているセクシュアル・マイノリティは、安定した全体的同一性の感覚を持っていること（西谷, 2014）、自尊心に良い影響を及ぼしていたこと（三宮, 2014）から、自身の同性愛的感情を受け入れることができる段階に到達することの好ましさが示されている。反面、同性愛者であることを受け入れられない段階では誰にも相談できず、孤独感や孤立感を強め、不適応を起こしたり、自殺を考へてしまう場合もある（河口, 2010）。同性愛者の自己受容の過程において、他者との親密な対人関係が妨げられる可能性がある（堀田, 1998）が、中学生や高校生段階での、コミュニティへの参加や当事者・周囲からの相談体制は充実していない。また、発達段階的に、恋愛そのものが未知の感情である場合や、クエスチョニング

(自己のセクシャリティが確立していない状態)である可能性も高く、セクシャリティを開示する段階に至ることが少ない。

そのため周囲にモデルケースが存在せず、同性愛感情を特異的なものと感じたり、孤立感を高めやすい。中学生や高校生段階では大学生や大学院生段階より自己のセクシャリティを隠したり、未知の存在である同性愛やLGへの否定的感情が持たれやすいと考えられる。

また、先行研究より、LG当事者が性的指向を意識した年齢は中学1～2年生であることが明らかにされている(いのちリスペクト。ホワイトトリボンキャンペーン, 2014)。更に石丸(2001)は、同性愛アイデンティティの発達過程として、①同性愛に嫌悪感を持つ時期、②同性愛と異性愛のどちらに価値を置くかで混乱し揺れ動く時期、③同性愛・異性愛ともに安定した価値づけができ同性愛が自己に上手く統合された時期の3段階を提案している。思春期を迎え性的指向に関心が向く中学校頃に、性的指向を自覚し、同性愛に嫌悪感を持つ時期があることが、LGへの否定的感情を強めると言える。さらに日高ら(2007)によるとゲイ男性やバイセクシュアル男性が「同性愛であることをなんとなく自覚したのは」平均13.1歳であり、「自殺を考えた」のが平均16.4歳であり、中学生や高校生段階は、当事者にとって重要な時期であり、周りの同学年の生徒たちがLGについてどのような意識を持っているのかを明らかにすることによって、今後の対策を考えるうえでも重要な知見を得られると考えた。

9. 本研究の目的と仮説

以上より、LGへの偏見・態度を変容させる要因は、先行研究などから良好な接触体験、正しい知識、性役割態度など多数の要因が示されている。その中で本研究では、中学生、高校生、大学生を対象に、性的指向に関する意識に対して、接触体験、知識が関連するのか、また、思春期の特性である他者と同じでありたい、自分と異なるものを排斥する傾向とLGへの態度に関連があるか否かについて検討することとした。

仮説は以下のとおりである。

仮説1: LGへの態度は年齢によって異なり、中学、高校、大学と高くなるほど肯定的である。

仮説2: 異質拒否、被異質視不安とLGへの態度は関連する。

【対象と方法】

本研究では、中学生、高校生及び大学生に対し質問紙調査を行った。既存の尺度から項目を選定した後、妥当性を検討し、質問紙を作成した。

1. 項目の作成及び選定

(1) フェイス項目

対象者は、それぞれ所属の学校で質問紙の回答を求めたので、フェイス項目としては、年齢、性別をたずねた。性別については、自由記述とした。また、これまでの自分と同じ性別の対象に恋愛感情をいただいたことがあるかについても回答を求めた。これは、LGに対する態度に関して、自身も同性に恋愛感情を抱いた経験のあるものと、抱いた経験のないものでは、異なるであると推測したからである。

(2) LGに対する態度尺度

LGに対する態度については、信頼性・妥当性のあるこれまで様々な先行研究で使用されてきた尺度を参考に使用することとした。Worthington, Dillon, & Becker-Schutte(2005)が作成したLesbian, Gay, and Bisexual Knowledge and Attitudes Scale for Heterosexuals(LGB-KASH)の日本語版LGB-KASH-J(Kasai, & Okahashi, 2008)を使用した。Kasai & Okahashi(2008)によると、このオリジナルの尺度には、宗教的葛藤についての項目やアメリカの同性愛に関する歴史的事実等についての項目も含まれていたため、それらを削除したものをバックトランスレーションの過程を経て作成された全28項目から構成されている。LGB-KASH-Jは、Kasai & Okahashi(2008)による調査において項目分析、因子分析の結果19項目となっている(Table 1)。小渡・葛西(2015)の研究結果では、LGB-KASHの因子分析では、16項目となっている(Table 2)。

これらの中から、中学生に回答を求めるのにふさわしくないもの(上司に対する感情を問う項目等)を削除した上で、正しい知識の測定のため、「私には同性愛者の親しい友人がいる」「私は同性愛について人に説明できる」「同性愛・両性愛は他の人と変わらないと思う」「私の通っていた学校(中・高)では同性愛者の人はハラスメント(いじめ等を含む)を受けていた」「自分が同性にとって性的魅力があると知っても不快ではない」の5項

目を追加した。また、調査協力者の回答の負担を減らすため、内容が重複されていると考えられるものを削除し、中学生や高校生に回答を求める関係上、使用する語彙を理解が容易になるよう大幅に改変し、LGへの態度を測定する尺度としてまとめた。最後に心理系大学院教授1名及びセクシュアル・マイノリティを専門に研究する大学院生5名と共に検討を行い、妥当性を検討し、最終的に31項目のLGに対する態度尺度とした。この尺度について大学生94名を対象に予備調査を実施した。その結果、因子分析の共通性、負荷量等から13項目が削除され、最終的に18項目の尺度として本調査で使用することとした。

(3) 被異質視不安・異質拒否に関する尺度

調査対象者の友人への被異質視不安、異質拒否傾向を測定するために、被異質視不安項目・異質拒否傾向項目を用いた。これは高坂（2010）が、異質を拒否する心性として作成した、被異質視不安傾向および異質拒否傾向を測定する尺度である。高坂（2010）は、被異質視不安を「同性友人との関係において友だちから異質な存在として見られることに対する不安」、異質拒否傾向を「同性友人との関係において自分とは異質な存在を拒否しようとする傾向」と定義している。被異質視不安や異質拒否傾向は、青年期前期ではともに高いが、年齢を経るにつれて、被異質視不安が低減することが示されている。異質者排除意識と類似した心性であるとしている。できるだけ友達と同じであろうと気を使っている、友達と違う意見を言うのが怖い等の12項目から構成される「被異質視不安」、同じ価値観の友だちとだけ付き合いたい、気があわない友だちとは関わりたくない等の12項目から構成される「異質拒否傾向」の2つの下位因子から構成される。25項目から構成され、1項目を削除した上で、十分な内の一貫性があるとした。本研究では、因子負荷の高い順に各下位因子を5項目ずつ用いた。

「あなたが同性の友人とつきあうときの気持ちや考えにどの程度あてはまりますか。もっとも近いものを1つ選び、数字を丸で囲んでください。」という教示文を提示し、これらの項目について、5件法で尋ねた。

2. 調査方法と対象

4年制大学では、教育系授業にて質問紙を配布し、その場で回答を求め、約15分後に回収した。配布する際には、注意事項を説明した。中学校と高校では、フェイスシートの注意事項を読み上げてもらった上で、各担当が配布、その場で回収した。調査時期は、大学生が2018年10月、中学生が2018年11月、高校生が2019年2月であった。

4年制大学の学生及び、中学校、高校に所属する生徒に調査協力を求めた。その中から、同性に恋愛感情を抱いた経験があると回答したデータ及び、回答に大きな欠損のあったデータ等23名を排除し、分析に使用した。大

Table 1 LGB-KASH-J (Kasai & Okahashi, 2008)

1	息子の男性の先生が同性愛者だと知ったら、嫌な気がする
2	上司が同性愛者だと分かったらいやな気がする
3	近所の人がセクシュアル・マイノリティだと分かったら、嫌な気がする
4	同性に誘惑されても不快ではない
5	ゲイバーにいるところを他人に見られたらいやな気がする
6	集会・パーティーなどで、セクシュアル・マイノリティと気兼ねなく話せる
7	自分の親友が同性愛者だとわかってても不快ではない
8	同性の人が言い寄ってきたら、気分を害す
9	兄弟や姉妹がセクシュアル・マイノリティだと分かったらショックだ
10	セクシュアル・マイノリティのグループの中では落ち着かない
11	職場に女性の同性愛者がいても不快ではない
12	娘の先生が女性の同性愛者だと分かっても不快ではない
13	男性二人が手を繋いで歩いているのを見たら気持ちが悪い
14	自分が同性にとって性的魅力があると知っても不快ではない
15	自分の配偶者・パートナーが同性に性的に魅かれると分かったらいやな気がする
16	自分の子どもが同性愛者もしくは両性愛者だと分かったらがっかりする
17	子どもがセクシュアル・マイノリティと分かったら自分が親として失格だと感じる
18	自分の親が同性愛者だと知っても不快ではない
19	職場に男性の同性愛者がいても不快ではない

Table 2 LGB-KASH (小渡・葛西, 2015)

1	病院は同性のパートナーも近親者（親や配偶者等）と同じように認めるべきである
2	私はセクシュアル・マイノリティの市民権を促進する社会的活動に参加してもかまわない
3	私は同性間の結婚が認められるべきだと思う
4	私はセクシュアル・マイノリティへ支援するために、シンボル（レインボー等）を掲げてもいい
5	学校における人権教育で、セクシュアル・マイノリティについて扱っていくべきだ
6	セクシュアル・マイノリティの人に対する肯定的な態度を子どもに教えることは重要である
7	ほかの夫婦同様に同性のパートナーにも健康保険が適応されるべきだ
8	セクシュアル・マイノリティに対して肯定的であるように私は他人に教えることができると思う
9	私にはセクシュアル・マイノリティの親しい友人がいる
10	私はセクシュアル・マイノリティについて人に説明できる
11	私は性自認と性指向の違いが説明できる
12	セクシュアル・マイノリティの生徒や親、クライアントから相談があった際に、適切な対応ができる
13	私はセクシュアル・マイノリティに対する否定的な考えを分かち合えない人といるときは自分の考えを隠している
14	私はセクシュアル・マイノリティを嫌悪している人といるときは、セクシュアル・マイノリティに対する肯定的な気持ちを隠している
15	私は公の場でセクシュアル・マイノリティの知人に挨拶するときに、人目を気にしてしまうだろう
16	セクシュアル・マイノリティの人を避けることは私にとってはとても重要だ

1 から 9 は肯定的態度、10 から 12 は知識、13 から 16 は否定的態度

学生94名（男性16名、女性77名）、高校生54名（男性10名、女性44名）、中学生197名（男性107名、女性90名）であった。

分析にあたって、SPSS (Ver 23)を用いて統計処理を行った。

【結果】

1. 各尺度の因子分析

LG に対する態度尺度と被異質視不安・異質拒否に関する尺度を別々に記述統計量を算出し、その後、中学生、高校生、大学生の全データを合わせて因子分析（主因子法、プロマックス回転）を行った。その結果、4 因子が抽出された (Table 3)。

第1因子は、「学校に女性の同性愛者がいても嫌ではない」、「自分が同性にとって魅力があると知っても嫌ではない」、「そんなに親しくない友人や知人に、同性愛者がいる」、「学校に男性の同性愛者がいても嫌ではない」等に負荷量が高く、「寛容の肯定」因子と命名した。第2因子は、「家族は同性愛を嫌なものだと思っていると思う」、「男性二人が手を繋いで歩いているのを見たら、気持ち悪いと思う」、「同性愛者とはかかわりたくない」等は、逆転項目として、「同性に誘惑されても嫌ではない」、「同性の人から恋愛的に誘われたらいい気分がする」の項目に負荷量が高く、「肯定・恋愛」因子と命名した。第3因子は、「同性の人が恋愛的に誘ってきたらいやな気がする」、「兄弟姉妹が同性愛者だとわかったらショックだ」に負荷量が高く、「動揺・否定」因子と命名した。第4因子は、「自分は同性愛者だと打ち明けてくれた友達がいる」、「家族や親しい友人に同性愛者がいる」に負荷量が高く、「直接的体験」因子と命名した。

信頼性については、クロンバックの α 係数で内的整合性を確認したところ、第1因子 $\alpha=0.75$ 、第2因子 $\alpha=0.60$ 、第3因子 $\alpha=0.65$ 、第4因子 $\alpha=0.60$ となり、信頼性の数字において一部低い数字が見られたが、先行研究 (Kasai & Okahashi, 2008; 葛西・小渡, 2015) とほとんど一致した因子であったので、一定のまとまりがあると考えそのまま利用すると共に、慎重に考察を進めることとした。

被異質視不安・異質拒否に関する尺度に関しては、別々に信頼性をクロンバックの α 係数で内的整合性を確認したところ、被異質視不安尺度は、 $\alpha=0.84$ 、異質拒否尺度は、 $\alpha=0.84$ となり、信頼性が確認された。

Table 3 LG に対する態度尺度の因子分析（N=339）

	因子名			
	寛容的肯定	肯定・恋愛	動揺・否定	直接的体験
13 学校の女性の同性愛者がいても嫌ではない	.827	.018	.043	-.081
3 自分が同性にとって魅力があると知っても嫌ではない	.736	-.126	-.167	-.084
2 そんなに親しくない友人や知人に同性愛者がいる	.590	-.117	-.103	.352
1 学校の男性の同性愛者がいても嫌ではない	.497	.479	.192	-.115
11 自分の親友が同性愛者だとわかってても嫌ではない	.385	.125	-.034	.000
17 家族は同性愛を嫌なものだと思っていると思う	.160	-.549	.023	.151
6 男性二人が手を繋いで歩いているのを見たら、気持ち悪いと思う	-.417	-.518	.093	.049
8 同性愛者とはかかわりたくない	.166	-.510	.479	.065
10 同性愛者の人に会ったらどうしていいかわからないと思う	-.290	-.484	-.015	.000
4 同性に誘惑されても嫌ではない	.083	.480	-.012	.231
12 同性の人から恋愛的に誘われたらいい気分がする	.042	.468	.161	.238
7 同性の人が恋愛的に誘ってきたら、嫌な気分がする	-.109	.076	.713	-.149
5 兄弟姉妹が同性愛者だとわかったらショックだ	-.246	.076	.709	.040
15 同性愛と聞くと特別なものだと感じる	.110	-.134	.276	.217
14 自分は同性愛だと打ち明けてくれた友達がいる	-.098	.065	-.078	.619
9 家族や親しい友人に同性愛者がいる	-.287	.213	-.011	.618
16 同性愛を嫌だと思っている友達がいる	.160	.012	.272	.361
18 同性愛を面白いがる映像や漫画を見たことがある	.160	-.237	.037	.322

2. 各尺度の関連

初めに、中学生、高校生、大学生それぞれで各尺度間の記述統計量を算出し、結果を Table 4 に示した。また、校種によって差があるかを一元配置分散分析によって検討した。LG への態度のすべての因子において、また被異質視不安と異質拒否の両方の因子において、校種による違いが有意に見られた。LG への寛容的肯定的態度は、中学生より高校生や大学のほうが高く、肯定・恋愛に関する態度では、中学生より高校生が高かった。動揺や否定的態度においては中学生より大学生のほうが高かった。LG に対する直接的接触体験は、高校生や大学より中学生が高かった。被異質視不安は中学生が高校生より高く、高校生はその間の得点であり、有意ではなかった。さらに異質拒否では、中学生より高校生、大学生のほうが有意に高かった。

次に各因子間の相関係数を算出した (Table 5)。校種ではなく年齢と各因子との相関では、LG への態度の「寛容的態度」「動揺・否定」因子において強い正の有意な相関があり、「肯定・恋愛」とは弱い正の相関、「直接的体験」とは負の相関があった。また、異質拒否傾向とは弱い正の相関があった。「寛容的態度」は、「肯定・恋愛」「動揺・否定」と弱い正の相関があり、「直接的体験」とは弱い負の相関があった。「肯定・恋愛」は、「動揺・否定」と中程度の正の相関と、「直接的体験」とは弱い正の相関があった。「動揺・否定」は「異質拒否」と弱い正の相関があった。「異質拒否」と「被異質視不安」の間にも中程度の正の相関がみられた。

Table 4 各尺度の因子得点（N=338）

尺度	因子	①中学		②高校		③大学		F 値	有意確率	
		平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差			
	寛容的肯定	2.12	0.61	3.52	0.91	3.59	0.89	157.56	***	① < ②③
	肯定・恋愛	2.97	0.78	3.32	0.68	3.17	0.71	5.79	**	① < ②
	動揺・否定	2.40	1.08	2.67	1.03	2/97	1.14	8.73	***	① < ③
	直接的体験	2.71	0.80	2.02	0.78	2.18	0.94	21.40	***	① > ②③
被異質視不安	被異質視不安	2.94	0.97	2.56	0.92	2.70	1.01	3.91	*	① > ②
異質拒否傾向	異質拒否	2.19	0.82	2.51	0.84	2.45	0/83	4.71	*	① < ②③

*** p<.001.**p<.01,*p<.05

Table 5 各因子間の相関

		寛容的肯定	肯定・恋愛	動揺・否定	直接的体験	異質拒否	被異質視不安
年齢	r	.721**	.156**	.343**	-.334**	.139*	-.110
	P	.000	.006	.000	.000	.013	.050
寛容的肯定	r		.291**	.244**	-.292**	.135*	-.095
	P		.000	.000	.000	.019	.102
肯定・恋愛	r			.412**	.264**	.078	-.038
	P			.000	.000	.178	.507
動揺・否定	r				.099	.229**	.064
	P				.079	.000	.270
直接的体験	r					.097	.110
	P					.094	.056
異質拒否	r						.415**
	P						.000

** p<.01, *p<.05

3. 諸要因と同性愛に対する態度の関連

諸要因がLG態度にどのような影響を示すかを検討するため、LGへの態度尺度の因子「寛容的肯定」「肯定・恋愛」と「動揺・否定」「直接的体験」をそれぞれ従属変数とし、年齢、被異質視不安、異質拒否を独立変数として重回帰分析（強制投入法）を行った（Table 6）。

「寛容的態度」には、年齢と被異質視不安・異質拒否が52.6%を説明していたが、有意なのは、年齢のみであった。「肯定・恋愛」には、どの独立変数も有意ではなかった。「動揺・否定」には、年齢と被異質視不安・異質拒否が、14.7%を説明しており、年齢と被異質視不安が有意であった。「直接的体験」には、年齢と被異質視不安・異質拒否が27.4%を説明していたが、年齢のみが有意であった。

Table 6 LGへの態度に及ぼす影響

		β	t-value	p	R	R ²	F	p
寛容的肯定					0.725	0.526	108.19	***
	年齢	0.717	17.231	***				
	被異質視不安	0.022	0.473	n.s.				
	異質拒否	0.038	-0.834	n.s.				
肯定・恋愛					0.161	0.026	2.6	n.s.
	年齢	0.116	1.946	n.s.				
	被異質視不安	0.09	1.368	n.s.				
	異質拒否	-0.066	-1.024	n.s.				
動揺・否定					0.384	0.147	16.866	***
	年齢	0.316	5.671	***				
	被異質視不安	0.164	2.675	**				
	異質拒否	0.022	0.362	n.s.				
直接的体験					0.523	0.274	18.238	***
	年齢	0.259	-3.386	***				
	被異質視不安	0.021	0.366	n.s.				
	異質拒否	0.131	2.275	n.s.				

*** p<.001, **p<.01, *p<.05, n.s. not significant

【考察】

本研究の目的は、これまであまり研究されてこなかった中学生や高校の同性愛者(LG)に対する態度を明らかにすること、また、LG に対する態度に影響すると考えられる要因との関連について明らかにすることであった。初めに仮説として、以下の二つをあげた。

仮説1：LG への態度は年齢によって異なり、中学、高校、大学と高くなるほど肯定的である。

仮説2：異質拒否、被異質視不安と LG への態度は関連する。

1. 年齢と LG への態度の関連

LG への態度は年齢が高くなるにつれて肯定的になるという仮説については、校種による比較の分析から、中学生より、高校生のほうが、寛容的に肯定的であり、肯定的で恋愛対象とみられても嫌な気がしないと思っていること、また周りに同性愛者であるとカミングアウトした人がいたりすることが明らかとなった。また、中学生より大学生のほうが、寛容的に肯定的であるが、同時に自分が恋愛対象にみられたり、兄弟姉妹が同性愛者だったらショックであると動揺したり、否定であることも明らかとなった。これは、相関関係の結果においても、年齢と寛容の肯定は、強い正の相関があり、年齢が高くなるほど、学校に女性や男性の同性愛者がいても嫌ではないし、知り合いに同性愛者がいても嫌ではない、もう少し近い親友が同性愛者であっても嫌ではないと思っていると示されたことから明らかとなった。しかし、同性から恋愛対象として誘われたり、兄弟姉妹が同性愛者だったりしたらショックだというような動揺や否定的な気持ちと年齢や寛容的な肯定や、同性愛者に対して肯定的で、誘惑されても嫌ではないという側面とも関連があった。自分の周りに同性愛であると打ち明けてくれた友人がいたりする体験と年齢、寛容の肯定、肯定や恋愛との関連があった。しかし、直接的な接触体験は高校生や大学生より中学生のほうが多かった。仮説1の年齢が高くなるほど、肯定的になるというのは、全体的には支持されたが、同時に、年齢が高くなるにつれて、より現実的なこととなり、友人知人、親友が同性愛であっても嫌ではないが、兄弟姉妹となると否定的となり、また、自身が恋愛対象として見られたり、誘われたりしたら、いい気がしたり、嫌な気がしたりと複雑な感情を抱くのではないかと推測できる。中学生のほうが同性愛者だと打ち明けてくれた友人がいるという結果については、これまでの先行研究（田中ら、2019）では見られなかった結果であるが、文部科学省からの通達（2010、2015）後、教育委員会や、各学校では、セクシュアル・マイノリティについての人権学習が実践されるようになり、当事者が学校等に来校し、講演をしたりする機会も増えたと考えられる。そのような状況の中、自分は同性愛者であるとカミングアウトする中学生が出現してきたのかもしれない。そして、直接接触が偏見の解消に良い影響を及ぼすことについては、Allport(1954/1968)の接触仮説や、数々のセクシュアル・マイノリティへの態度研究（和田、2010；山本ら、2012）において指摘されており、今後、現在中学生が成長していくと、社会全体として LG に対する態度がさらに肯定的になっていくのではないかと推測できる。

2. 異質拒否と被異質視不安と LG への態度の関連

まず、被異質視不安、異質拒否それぞれの傾向についてであるが、被異質視不安は、中学生と高校生の間に有意な差があり、中学生の方が他者から異質であるとみられることに不安を持っていることが明らかとなった。異質拒否は、中学生より高校生や大学生のほうが有意に高く、中学生は自分と異なる者に対する拒否感が、高校生や大学生より低いということが明らかとなった。被異質視不安と異質拒否との間には、正の相関があり、相互に関連する心性であることが明らかとなり、これは田中ら（2018）の先行研究の結果とも一致する。他者から自分が異質であると思われたくない者は、他者と同じであることを求め、異質な者をより排除するようになることは想像に容易い。また、被異質視不安は、LG への態度の動揺や否定に影響していることも明らかとなった。さらに、異質拒否と LG への態度の動揺や否定が少しではあるが関連していることも明らかとなった。

被異質視不安は、「友達からどう見られているのか気になる」「友達と違う意見を言うのが怖い」など、望んではいるわけではないが、同調的な意見を選ぶ心性であり、それが、現在日本では偏見もありネガティブなものとして捉えられている LG への態度を否定的なものにさせたと考えられる。LG について、回答者本人は、無関心または好意的に捉えていながらも、「周囲は否定的に考えているから」という心性が働いたのではないかと考えられる。しかし、被異質視不安に関しては、高校生は中学生よりも低くなっており、自分は自分であり、他者から異質なものであるとみられてもそれほど不安にならなくなるのであれば、LG に対する態度も周りの影響が減

り、肯定的にとらえる者、寛容的に受け取る者も出てくるだろうと考えられる。

3. 本研究のまとめ

本研究では、2つの仮説を設定し、その検証を試みた。その結果、LGへの態度は年齢により異なり、年齢が高くなるにつれて肯定的になるという第1の仮説については、全体的には支持されたが、同時に、年齢が高くなるにつれて、LGに関することは、より現実的なこととなり、友人知人、親友が同性愛であっても嫌ではないが、兄弟姉妹となると否定的となり、また、自身が恋愛対象として見られたり、誘われたりしたら、いい気がしたり、嫌な気がしたりするという結果にもなった。また、中学生の方が、LGとの直接的な接触経験が高校生や大学生よりも多いという結果となった。これは、文部科学省の2010年の通達以降、教育現場が少しずつ変容し始めたこと、メディア等でLGを含むセクシュアル・マイノリティに関連する番組やニュース等を目にする機会が増えてきたことなどが影響しているのではないかと考えられる。つまり、現在の中学生は、高校生や大学生が中学生であったときよりもLGを含むセクシュアル・マイノリティについて学習する機会も増え、学校現場では当事者の方の講演会や研修会等の機会も増えてきたのかもしれない。それにより当事者とかかわったことがあるという直接的な体験をしている中学生が多くなったと推測できる。しかし、教育現場の状況としては、高校も同じであるはずだが、高校生は直接的なLGとの体験が一番低かった。先行研究でも述べたが、多くの研究で、セクシュアル・マイノリティの当事者が学校でいじめの被害者となったり、不登校になったりしているが、これは、高校生よりも中学生において多く経験されており、この事態に対処することが大切であると感じている中学校教員の意識が高校の教員よりも高くなっているのかもしれない。そのために、先に述べたような当事者や専門家を招聘しての講演会や研修会の機会が多くなっているのではないかと考えられる。

第二の仮説である被異質視不安と異質拒否のLGへの態度の影響についてであるが、田中ら(2018)の研究結果と同様に、被異質視不安と異質拒否の間には正の関係があり、自分を他者から異なるとみられたくないし、自分や周りの者から異質であると見られる者には拒否的であるという傾向は中学生、高校生、大学生にみられた。特に被異質視不安は中学生が高く、異質拒否は高校生、大学生が高かった。中学生にとっては自分と関連があることに対して不安に思いがちで、かつ、同調傾向が強いため(松本・葛西, 2009)、できるだけ自分が他者から異質なものであるとみられないようにと思っているのかもしれない。ただ、中学生は行動範囲が限られており、また知人や友人の範囲も限られている。そのため、高校生や大学生ほど、異質な者に出会う経験が少ないのかもしれない。そのために異質拒否の傾向が低くなったとも考えられる。現在の中学生が異質拒否傾向を低く保ち続けることができるかどうかは、学校現場での多様性に関する取り組みを行うかどうかにかかわってくるであろう。多様な他者と関わり、親密な関係を築くことができれば、異質拒否傾向は低いまま高校生、大学生へと成長していくことが可能であると考えられる。

また親や友人といった所属集団がLGへの態度に影響していることから、中学生の生徒のみならず、保護者や周囲の人々のLG、及び多様性への肯定的態度を育てていく必要もあるだろう。さらに、Stotzer(2009)は、LGBに肯定的な態度が形成される要因の一つとして、個人的接触経験や小学校教育によってLGBは異常ではないという態度が早期に形成されていることを明らかにしており、今後は、中学生だけでなく、小学生にも性の多様性に関する教育を実施していく必要があると考える。

4. 研究の限界と展望

本研究の問題点の1つとして、サンプルの偏りが考えられる。大学のサンプルのほとんどは心理学部の学生であり、更に男女比が大きく異なる。藤井(2005)は福祉系の学生は、社会的に容認されていない人々に対し同情的であるとの示唆をしており、これは人を支援することを目標に学ぶ心理学部にも同様のことが言える。異なる学部や学科で調査を行うか、学部や学科によって同性愛に対する態度が変化するかを検討すべきであろう。中学校は公立の2校、高校は公立の1校であり、学年も異なっていたが、尺度によっては大きく数字が異なる項目も見られた。両学校段階に言えることだが、数校のみの調査では、校風や地域差、男女比といった影響を除外できない。調査対象を広げることで、より正確な結果が得られるだろう。更に、中学校での調査結果は、因子分析の結果信頼性に疑問が残るものとなった。今後は、さらにサンプル数を増やし、また多様な対象に対して調査をしていく必要があると考える。

引用文献

- Allport, G. (1954). *The nature of prejudice*. Reading, MA: Addison-Wesley. (オールポート, G. 原谷達夫・野村昭 (共訳) (1968). 偏見の心理 培風館) p. 36-37, 45-46, 74-76.
- 日高庸晴・木村博和・市川誠一 (2007). ゲイ・バイセクシュアル男性の健康レポート2, 厚生労働省エイズ対策研究事業「男性同性間の HIV 感染対策とその評価に関する研究」成果報告.
- 堀田香織 (1998). 男子大学生の同性愛アイデンティティ形成 学生相談研究 19 (1), 13-21.
- いのちリスペクト. ホワイトトリボンキャンペーン (2013). LGBTの学校生活に関する実態調査
<http://endomameta.com/ashoolreport.pdf> (2019年1月16日取得)
- 池上知子 (2014). 差別・偏見研究の変遷と新たな展開—悲観論から楽観論へ— 教育心理学年報 53, 133-146.
- 石丸径一郎 (2001). マイノリティ・グループ・アイデンティティ—人はいかにして自らに付与された差異を取り扱うか, 東京大学大学院教育学研究科紀要, 41, 283-290.
- 石丸径一郎 (2003). レズビアン, ゲイ, バイセクシュアルについて 心身医, 44 (8), 590-594.
- 梶谷奈生・横山恭子 (2007). 同性愛者の開示/非開示に対する意識—同居する同性カップルの事例から— 上智大学心理学年報, 31, 111-118.
- 葛西真記子 (2011). 同性愛・両性愛肯定的カウンセリング自己効力感尺度日本語版(LGB-CSIJ)作成の試み 鳴門教育大学紀要, 26, 76-87.
- Kasai, M. & Okahashi, Y. (2008). Japanese Version of LGB Knowledge and Attitudes Scale for Counselors, The 116th Annual Meeting of American Psychological Association (Boston, U.S.A.)
- 河口和也 (2000). 同性愛とピア・カウンセリングアカーの電話相談の経験から 臨床心理学研究, 37(4), 70-73.
- 桐原奈津 坂西友秀 (2003). セクシャル・マイノリティに対するセクシャル・マジョリティの態度とカミング・アウトへの反応 埼玉大学紀要 教育学部 (教育科学1), 52 (1), 55-80.
- 桐原奈津・坂西友秀 (2003). セクシャル・マイノリティとカミング・アウト 埼玉大学紀要 教育学部 (教育科学1), 52 (2), 121-141.
- 高坂康雅 (2010). 青年期の友人関係における被異質視不安と異質拒否傾向——青年期における変化と友人関係満足度との関連—— 教育心理学研究, 58, 338-347.
- 毎日新聞 (2016/3/18). 「教科書検定: 「LGBT」初登場多様な性, 高校で学んで」
<http://mainichi.jp/articles/20160318/k00/00e/040/232000c> (2016年12月12日取得)
- 松本麻里・葛西真記子 (2009). 青年期の友人関係における同調行動に関する研究, 鳴門生徒指導研究, 19, 81-93.
- 松尾由希子 (2013). 学校教育と社会における性的マイノリティに関する言説研究: 1990年以降の教育メディアと新聞記事の記述分析 静岡大学教育研究, 9, 17-38.
- 文部科学省 (2010). 児童生徒が抱える問題に対しての教育相談の徹底について (通知)
- 文部科学省 (2015). 性同一性障害に係る児童生徒に対するきめ細かな対応の実施等について
- 中島亜弥 (2012). 個人内要因の同性愛に対する態度への影響—同性に魅力を感じた経験の有無, 知識, 接触, 他者理解度など— 兵庫教育大学大学院学位論文 <http://hdl.handle.net/10132/7156>
- 西谷晋二 (2014). セクシャルマイノリティの心性に対する描画を用いたアプローチ—風景構成法と多次元自我同一性尺度の観点から— カウンセリング研究所紀要, 37, 29-39.
- Pew Research Center (2013). the global divide on homosexuality
<http://www.pewglobal.org/2013/06/04/the-global-divide-on-homosexuality/> (2015年12月7日取得)
- 三宮 愛 (2014). 女性同(両)性愛者のコミュニティ参加は健康・自尊心にどのような影響を及ぼすか—面接法と質問紙調査法による検討— 女性学評論, 28, 133-161.
- Stotzer, R. L. (2009). Straight Ally: Supportive Attitudes Toward Lesbians, Gay Men, and Bisexuals in College Sample Sex roles, 60, 67-80.
- Triandis, H. C. (1995) Individualism and Collection West Press (神山貴弥・藤原武弘編訳 (2002). 個人主義と集団主義—2つのレンズを通して読み解く文化— 北大路書房)
- 和田 実 (1996). 青年の同性愛に対する態度: 性および性別同一性による差異 社会心理学研究 12(1), 9-19.
- 和田 実 (2008). 同性愛に対する態度の性差—同性愛についての知識, 同性愛者との接触, およびジェンダー・タイプとの関連— 思春期学 26 (3), 322-334.

- 和田 実 (2010). 大学生の同性愛開示が異性愛友人の行動と同性愛に対する態度に及ぼす影響 心理学研究 81, 356-363.
- Worthington, L. R., Dillon, R. F. & Becker-Schutte, M. A. (2005). Development, Reliability, and Validity of the Lesbian, Gay, and Bisexual Knowledge and Attitudes Scale for Heterosexuals (LGB-KASH), *Journal of Counseling Psychology*, 52(1), 104-118.
- 山本章加・大蔵雅夫・重本津多子 (2012). パーソナリティとイメージが同性愛者に対する態度に与える影響 徳島文理大学研究紀要 84, 85-91.
- 吉仲 崇・風間 考・石田 仁・河口和也・釜野さおり (2015). セクシュアル・マイノリティに対する意識の属性による比較：全国調査と大学生対象の先行研究を中心に 新情報 103, 20, 1-13.

Effect of Anxiety on Being Viewed as Different and the Tendency to Reject People Who Seem Different on Attitude toward Lesbians and Gay Men among Junior High, High School, and University Students

KASAI Makiko* and TANAKA Mizuki**

A high risk of being bullied or having suicidal thoughts among sexual minority students has been reported. The special needs of sexual minority students have been brought to our attention by the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology (MEXT) in 2010 and 2015. Some schools have taken actions by holding special lectures or seminars about sexual orientation and gender identity. although, most schools have yet to adopt any measures in this regard. This study investigated the factors which influence the attitude towards lesbians and gay men (LG) among junior high, high school, and university students. The first hypothesis was that there was a relationship between age and students' attitude towards LG. The second was that there was a relationship between the anxiety of being viewed as different and the tendency to reject people who were different, and the attitude towards LG. The results showed that as the students got older, they had more positive attitudes towards LG. Further the tendency to reject people different from themselves was related to a negative attitude towards LG. The hypotheses were supported by our results; however, it should be noted that junior high school students reported more direct contact with LG than the other age groups. Some studies have showed a relationship between direct contact with LG and more positive attitudes towards them. Therefore, in the future prejudice and discrimination against LG might be reduced and positive attitudes toward them could become common in school environments.

*Training and Practice in Clinical Psychology, Naruto University of Education

**Licensed Psychologist, Naruto University of Education